



国府台女子学院 小学部だより

市川市菅野3-24-1

Te l 047-322-5644

F a x 047-322-5655

<https://www.konodai-gs.ac.jp/>

昔遊びの価値

～ コミュニケーション、手を動かし、創造力～

1年生は、生活科の学習で昔遊び体験をしています。昔遊びといっても現在も親しまれている遊びもたくさんあり、全国の小学校で学習に取り入れられています。ということは、子供たちにとって必要な体験が昔遊びにあるからということになると思います。

現在、オミクロン株の感染拡大が顕著なため、今回は、地域の“すがの会”のみなさんに実際にお手玉などで遊んでいる場面を録画させてもらい、子供たちは、その様子を参考にしながら楽しく遊び、学ぶことができました。

あやとりなどは、一人で10回も形を変える技もありますし、折り紙などは、動物など複雑な折り方のものもあります。このように、昔遊びには、指や体全体を使うことで、脳の働きや創造力を鍛える効果、巧緻性を高める効果など、電子ゲームとは異なるよさがあります。

また、今はコロナ禍でできませんが、複数で楽しめ、コミュニケーション能力を高める昔遊びもたくさんあります。おうちの方が、昔取った杵柄で、見事にけん玉の技を見せて盛り上がったという話もありましたので、感染状況が改善しましたら、友達やご家族で楽しんでいただけたらと思います。



2月行事予定

4日 仏教朝礼(放送)	17日 学級懇談会
7日 朝会(放送)	(オンライン)
11日 中学部入学ガイダンス	18日 涅槃会(放送)
(動画配信開始)	22日 職員会議
建国記念の日	25日 仏教朝礼(放送)
12日 休業日	26日 休業日
アフタースクール説明会	
(動画配信)	



佐原 校外学習

2022年2月号

1月13日、4年生は、社会科の学習の一環として佐原方面で校外学習を行いました。

日本地図を歩いて測量し完成させた伊能忠敬の偉業を自分たちの目で確かめながら、その苦勞を感じ取っていました。

まだ人工衛星などが無い時代に、現代とほぼ同じくらいの正確な地図が作られたことは、忠敬がどれほど学問を積んだかという表れでもあると思います。

また、小江戸と呼ばれ、伝統的な家屋や風情のある街並みにも目を奪われていました。

如 月

2月の和名は、如月ですが、意味としては、まだまだ寒さが厳しい時期なので、更に着物を重ね着するということから、「きさらぎ」と呼ぶようになったというのが有力な説です。しかし、この漢字でなぜ「きさらぎ」と読むのか不思議に思ったことはありませんか。

理由は、中国の2月の異名「如月(にょげつ)」が由来になっているようです。

また、他の呼び方には梅見月、雪消月、木芽月などがあります。他にもありますので、調べていただき、ご家庭での話題の一つにしていいただければと思います。



今月の目標

「新型コロナウイルスに感染しないように、健康に気をつけましょう」
「寒さに負けずに、元気に遊びましょう」

涅槃会

2月15日は、お釈迦様が入滅された日です。

お釈迦様は80歳で亡くなられたと伝えられています。インド北部のクシナガラという土地で、沙羅の大樹が2本立っているそのもとで頭を北に向け右脇を下にし、静かに横たわれ、取り囲んでいる多くの弟子たちに向かって、最後の説法をされ息を引き取られたと、経典は伝えています。

その最後の説法が「遺教経」として今日に残されています。その内容は、お釈迦様が自ら実践された、いわゆる修行の方法や内容、そしてそれらの意味にふれています。

お釈迦様は苦しい息の下で弟子たちを諭されます。「世の中のものはいずれ全て移り変わっていくんだよ。私だって例外ではない。悲しんだり悩んだりばかりしてはならない。私は間もなくこの世を去るだろう。でも、それは肉体が死ぬことなんだよ。私そのものが消えてなくなってしまうことではないんだよ。肉体の死というものは全ての生の終わりではない。いや、むしろ苦しみから放たれるひとつの姿でしかないんだよ。弟子たちよ。真の智慧を求めて弛むことなく努力しなさい。智慧の光を持つことができれば、全ての迷いの闇を照らすことができる。さあ、私はもう死を迎えます。これが私の最後に教えることですよ。



このようなお釈迦様の言葉で、この経典は閉じられています。

ちょっとうれしい話

～ 全国読書感想文コンクール 内閣総理大臣賞受賞 ～

毎年行われる、青少年全国読書感想文コンクールにおいて、5年生の泉奏花さんが、最高賞である内閣総理大臣賞を受賞しました。これは、小学部初の受賞で、大変素晴らしいことです。「人生をより豊かにするために」という題名で、金田一秀穂著「15歳の日本語上達法」を読んだ感想文です。

日頃の地道な読書活動の中で、著者と自身の考えとを比較しながら読み進め、読書を楽しんでいる成果だと思えます。